

香川大学インターナショナルオフィス・オフィスウィーク -SD1・2・3報告-

藤川 勝
(香川大学国際グループ)

香川大学インターナショナルオフィスは、オフィスウィークにおいて、SD（スタッフディベロップメント）1・2・3を実施した。

SD1は、医学部において、第1グループ（留学生交流に関すること）と第2グループ（研究者交流、国際共同研究、地域社会、国内外の研究機関等との連携など）の2班に分かれ、議論を行った。

第1グループでは、香川大学 ロン留学生センター長、高水講師（インターナショナルオフィス教員）、長岡（国際グループ）、藤川（国際グループ）、宗田（国際グループ）、寒川（医学部総務課課長補佐）、芝原（医学部学務室専門職員付）、徳島文理大学 上野哲夫氏（大学改革推進事業）、蜂須賀忍氏（大学改革推進事業） 県立保健医療大学 間嶋仙子氏（事務局 教務・学生担当）が参加した。

第1グループにおいては、国費留学生制度や奨学金制度、語学教育制度、宿泊施設、留学生センターとの関係等について、活発な議論を行い、次のような提言を行った。

※「国際化」への提言

徳島文理大学、県立保健医療大学の今後の国際化に向けて、3大学連携を通じて、香川大学医学部に在籍している留学生を2大学に派遣して、学生との国際交流を諮るとともに、継続的な交流の実施、留学生と接することによる国際的な視野を広め、国際化に結びつけることが大切。留学生の増大にも繋がる。

※「語学教育プログラム」実施の提言

徳島文理大学、県立保健医療大学が語学研修等の留学生向けのプログラムを実施する場合、医療、保健等の分野を中心として、日本語教育を加えたプログラムを実施することが考えられる。

※「留学生への対策」に関する提言

施設面での拡充が難したため、留学生向けのJASSO等の奨学金提供を通じて、留学生支援にあたる。施設面での拡充が諮られるよう、働きかけることが必要。等の提言があった。

第2グループでは、香川大学 徳田教授（医学部）、澤田准教授（工学部） 宮下（国際グループ）、宮脇（国際グループ）、八木（国際グループ）、林（医学部総務課長）、朝國（医学部企画調査係）、石川（医学部企画調査係）、山形（医学部企画調査係）、徳島文理大学 伊藤悦朗教授（香川薬学部教授）、森 雅美氏（大学改革推進事業） 香川県立保健医療大学 明石 亨主任（事務局 総務、戦略的大学連携支援事業担当）、高橋千佳氏（事務局 戦略的大学連携支援事業担当）が参加した。

第2グループにおいては、1. 受入制度、複数機関との連携、地域のコミュニティーとの連携、その他生活面での問題等について、議論を行い、次のような提言を行った。

※提言 留学生のアパート等の借用について、大学が組織として地域もしくはアパート等の経営者に対して働きかけを行う。(問題があった場合等の一部責任負担を含む。)

※提言 正規学生だけでなく、短期受入の留学生等への学割の適用を3大学連携して要望していく(香川大学では2009年から科目等履修生に対しても琴電の学割が適用されることになった。)

※提言 事務で協議を行い、共通インフラ整備を検討する。特に情報共有において共通のHPを作成することなどを検討する。

※提言 学生主体にコミュニティーとの連携づくりを企画する。

※提言 学長をはじめ執行部の強いリーダーシップで国際交流の重要性をアピールし、それに係わっている教職員に対する評価システムを考えるべき。情報発信、特に充実したHPの作成と情報発信は急務であり、早急に実現すべきである。等の提言があった。

第2部では、各グループからのまとめの発表があった後に、総合討論を実施した。各グループでの提言は、どれも重要なものであるとして認められた。

この他に、以下のような議論・提案が行われ、1. ホームページをはじめ、情報発信と共有が非常に重要である。できるだけ早くHPを立ち上げて欲しい。その際には徳島文理大学や県立保健医療大学ともリンクを張る。2. 各学部や3大学の事務連携を行う。国際交流の事務としては、かなり共通の基盤があるはずであり、そうした情報の整理を行って共通のデータベースを構築する。3. 各学部や3大学の学生(特に低学年生)が一緒に行けるような海外派遣プログラムを考える。等の意見が出た。

SD2は、工学部において、大平工学部長、秦教授、中西教授、郭教授、荒川准教授、澤田准教授、安岡学務係主任、西岡教務職員、長岡国際グループリーダー、藤川チーフ、宮脇チーフ、宗田グループ員、野田グループ員が参加して、国際化の取り組み等について、議論を行った。

工学部教職員から、資料に基づき工学部の国際交流：サボア大学との交流とIOREM、中国の大学との交流、フィンランドの大学との交流、留学生の修学状況－学部学生を中心について、工学部における留学生と国際交流、香川大学の国際化に向けた戦略と工学部としての役割等について報告が行われた。

国際交流と戦略についての議論では、「オフィスの誰が承認をされるか、承認機関としての役割を持っているか。協定の手続きの迅速化について、手続きを変えていかないといけない。」、「インターナショナルオフィスができて、これまで国際化について多くの意見を出してきたが、未だ明確な回答が得られていないし、KUIOの国際戦略として出されて居ることも未だ見えていない。」、「インターナショナルオフィスが出来て、香川大学としてどういう能力を持った優秀な留学生を獲得したいのか、戦略を立てられているのか。他の国内の大学では、中国やタイ、マレーシアなどにオフィスを持ち、積極的に大学の国際化を進めている。」等の意見が出た。

これらの意見を踏まえて、「インターナショナルオフィスが承認機関としての役割を明確にしていくことについては、今後、インターナショナルオフィス会議において検討を行うこととしたい。」「国際化を推進していくため、予算面等での支援を検討していくこととしたい。」「インターナショナルオフィスでは、第2期中期目標・中期計画において留学生受入数拡大に向けての方策等の検討を開始している。」等、今後のインターナショナルオフィス会議において、鋭意検討を行う旨説明を行った。

SD3は、第1部において、日本学術振興会バンコク連絡研究センター副所長 角田 亜紀子氏から、「日本学術振興会バンコク研究連絡センターの活動」について、説明があった。

初めに、JSPSはどのような組織であるかの説明があり、1. 学術研究の助成、研修者の養成のための支援、2. 学術に関する国際交流の促進、3. 学術の応用に関する研究を行うことによる学術の振興を図ることを目的とする。等の報告があった。

今回のトピックスに関係のある、学術に関する国際交流の推進について説明があり、重点的に行っていることについて、1. 欧米諸国との協力による世界水準の研究拠点の形成、2. アジアにおける学術コミュニティーの形成、3. 若手研究者の国際的な研鑽の機会の提供、4. 外国人研究者の招請、5. 国際学会等の支援事業、6. 大学国際化の支援等のことについて報告があった。

また、国際関係支援業務については、華やかな業務と思われるが、留学生のクレーム、トラブルが多く、臨機応変な対応が求められる、交渉力、精神的、体力的にタフであるべきである。プロ意識を持つことが必要である等の報告があった。

第2部では、SD1、SD2の報告を通じた、事務支援体制の在り方について、議論を行った。

SD1について、宮下国際グループサブリーダーから資料に基づき報告、SD2について、藤川国際グループチーフから資料に基づき報告があった。

村山オフィス長より、協定等の審議は、オフィス会議で通ったら、そのまま決定されているのが現状で、香川大学内での理解の温度差がある。いちばん大きなポイントは、大学が国際戦略を持てるかということである。2009年4月にインターナショナルオフィスが発足し、オフィスで議論してきた方とそうでない方と理解の温度差がある。明確な国際戦略を持って進んでいきたい。オフィスウイークをやってみなさんに国際戦略の方針を理解していただきたいというのが、今回の目的である。等の説明があった。

インターナショナルオフィスは、旧留学生センターからの教員と全学部からの併任教員なる組織からなる教員と国際グループのスタッフがおり、オフィスの直属するスタッフはいないという意見が出されたが、部局と本部の事務連携・協力が必要であると説明があった。

また、地域社会から浮遊したはなれた大学ではなく、地域に埋没することなく世界中の価値点と日本中の価値点と情報を交換しながら考えていきたい。海外交流拠点は何かを考えていただいて、フォーラムを考えていただきたい。と述べられた。

SDに参加した埼玉大学研究協力部 高尾国際交流支援室長から、埼玉大学が抱えている問題がかぶっている。香川大学はオフィスを立ち上げており、埼玉大学も来年立ち上げたいと考

えている。現在埼玉大学には、500名の留学生で推移。全国4番目の在留者がいる。大学として留学生数の確保については、危機意識がなく、メンテナンスができていない、どう留学生への支援が大切かを考えなければいけないと発言があった。

最後に村山オフィス長より、このオフィスウィークでは、3つのレベルで仕事をやってきており、学内シンポ、公開シンポの普遍的のレベルの議論、SD1、2、3は、情報の交換、共通理解を得ること、フォーラム1、2は大学であるかぎり、ディシプリンを持っており、海外交流拠点をどういうふうにすれば生き生きしたものにするか等を議論してきたと説明があり終了した。